

(延享四年)
丁卯正月二十九日 御朱印

今般以御書於被仰渡之趣、寫相達候條、拜見候而可奉得其意候。古來より之御家法、御先代相改候諸役所格式、且又御家中之面々儉約之儀等、去年大應院様被仰出之通萬端省略、古來質素之風俗に立歸相慎可申段は、委細其節申渡置候通に候故、唯今分而は不申渡候間、去年被仰出之趣、彌急度相守可申事。

右之趣被得其意、組・支配之人々は可被申聞候。組等之内裁許有之人々は、尤夫々申渡候様、是又可被申聞候。以上。
(延享四年) 二月

口上にて申達候趣

御家中之人々儉約之儀、御先代段々被仰出之趣有之候付而、何茂其心得仕躰に相聞候處、音信・贈答・餞別等之儀、表向にては指止、内々にては相止不申様にも沙汰有之候。若左様之儀有之候ては、いかゞ敷候間、右被仰出之趣彌嚴密に相守可然候。此段各爲心得申達候事。

(延享四年)
朱書。右同年十二月四日御用番奥村助右衛門殿被仰渡候趣也。

二五 家中風儀之儀被仰出

家中之人々風儀不宜、其内にも就中不覺悟之輩は、常々之所業遊樂を専とし、參會等之節亂行之仕形も有之躰聞及候。如斯に候ては、雖爲譜代舊功之家筋、不得已加嚴制候様可相成儀、甚以心外に候。依是此度改而申渡候間、是以後之儀急度相慎可申候。當時可相糺不法之者も先無貪着一統申渡候條、此旨令承知、自今之儀速可相改事。

附、無息之輩にも不行狀之者聞及候。是以父兄之不覺より如斯候間、人々子弟之成立肝要に可相心得事。

一、儉約之儀度々雖申渡、今以しかと不致得心、内外不都合之族も相聞、不料簡之至に候。是以後急度相守、萬事加勸辨、勝手取つゞき候様可相心得事。

右之趣人々能令得心候様可申聞候。組之内支配有之輩にも、不相洩様可申談候。畢竟かやうに風儀不宜儀は、常々頭共裁許不行届故に候間、隨分無油斷致指引、不心得之輩

は幾度も加異見、其上にも於不致承引は、速可達聽候。自然乍存等閑にいたし置候は、其頭共に可爲越度候。頭役申付置候面々之儀は、猶更人々身持等萬端相慎、勿論先代より被申渡置候趣、彌無違失急度可相守者也。
(寛延三年) 庚午十月廿八日

二六 勝手取續之爲貸銀被仰付候儀觸

御家中之人々、連々勝手不如意に相成候に付、享保十年御貸銀被仰付、其後上納銀并借銀・買掛銀書上に被仰付、就中延享三年にも上納銀并借銀・買懸銀書上に被仰付候得共、其驗無之、近き頃別て指つかへ候様子に相聞え候。右之通被仰付候上は、人々儉約を用、萬端致省略候は、左程難澁にも及申間敷儀に候。尤無據趣にて難澁之面々も可有之候得共、無謂及困窮候人々は不覺悟之仕合に候。然共其分に被指置候ては、必至と指支候族も可致出來躰に付、御上御餘力茂有之候ば、此度急度御救も被成度候得共、御要脚御指問、過分之御借銀有之候に付、不被任思召候。依之於大

坂御才覺銀之内を以、勝手爲取續一統知行高百石に付五百目充之圖、御貸銀被仰付候。右之通迄にては以後勝手取續候儀も成兼可申哉。就夫先例も有之儀故、上納并借銀・買懸銀等之分も書上に被仰付、除知を以返上有之候様可申渡候。如此被仰付候上は、萬事相改、隨分難難に相暮、勝手取續候儀肝要に候。若是以後無謂及困窮候人々は、可爲曲事旨被仰出候條、右之趣被得其意、組・支配之人々は可被申渡候。且又組等之内裁許有之面々は、其支配にも申渡候様可被申聞候。右御貸銀返上年限等之儀は、以別紙申達候事。

以上

御家中之人々困窮に付而、今般御貸銀被仰付、上納并借銀・買懸銀等書上に被仰付候段、別紙被仰出之通に候。當時御上御勝手御難澁故、於大坂等も莫大之御借銀有之、此御運び之道茂御指支に付、御家中知行免相をも御かり可被成御時節に候得共、其御沙汰無御座、右之通被仰付候儀は結構至極之儀に候間、此處人々致心服、是以後勝手取直し、御奉公相勤候儀肝要之事に候。此段不申達候而茂、其了簡有